

批判しながらも、よりいっそう強力に業績性へと子どもを導こうとする意図とも矛盾しない。このように考えたとき、広田の分類は、厳格主義、学歴主義、童心主義、児童中心主義の4つに書き換えうる。そして、この4つの類型は、出生児縦断調査から表れた4つの子ども観と整合的に解釈できるのではないだろうか。

すなわち、「調整・協調」かつ「知性」を重視する第1象限は、道徳・しつけに関する知を重視する厳格主義、「積極・自発」かつ「知性」を重視する第2象限は、子ども自身による知識の獲得を強調する学歴主義（より一般的な言い方をすれば業績主義）、「積極・自発」かつ「感性」を重視する第3象限は、何事においても子どもの自発性と感性を重視する児童中心主義、「調整・強調」かつ「感性」を重視する第4象限は、周囲に調和した子どもらしさを重視する童心主義と言い換えうる（図1）。

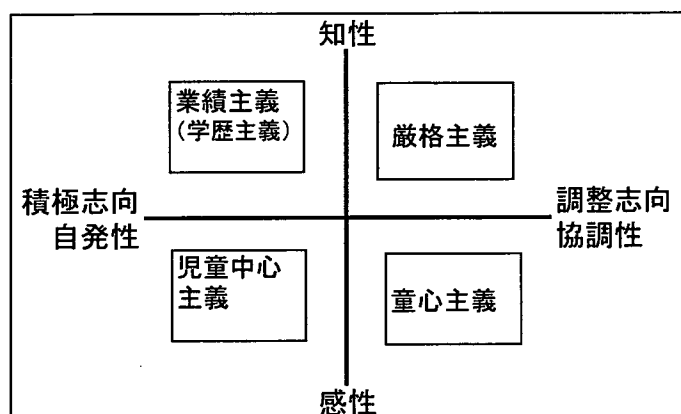


図1 「出生児縦断調査」における子ども観の4分類

## 1.2 子ども観の4分類の規定要因

なお、元森（2008）では、すでに、コレスポネンス分析の結果から、全ケースをこの4分類に分け、その規定要因を家族の属性や子ども側の要因に探っている。その結果をまとめた形で表1に再掲する。

それによると、子どもの性別と回答者が父か母かといったジェンダー要因は、調整か積極かの軸に関係している。兄弟がいるか弟妹がいるか、多胎児か否かといった子どもの出生順位も影響しており、三つ子や弟妹がいたりすると感性×調整、兄弟がいると知性重視となる<sup>2</sup>。また、子どもの成長が早いほうが積極性を志向しがちのようである。このような子どもの側の要因に加え、家族の社会的属性においても、いくつかの傾向が読み取れる。「知性×調整」型は、祖父母と同居、郡部、一戸建て、父母の職業威信が低く学歴も低いなど、一般に最も保守的と想定される層に多い分類と考えられる。それに対して、「感性×積極」

<sup>2</sup> 「おにいちゃん・おねえちゃんだから」といった配慮が働くことに加え、子ども観を漠然と聞いたとき、就学年齢の兄弟がいるとそちらに引っ張られて知性を協調するといった要因もあると考えられる。

型は、大都市、集合住宅、父母の職業威信や収入、学歴が高い、母親がフルタイムで働いているといった進歩的な層よりである。その間に当たる「知性×積極」と「感性×調整」は、前者は、父母の階層が「感性×積極」同様に高いのに加え、やや年齢が高い層、後者は、父母の学歴と年齢が低く、母親が主婦であるなどやや伝統よりの層よりの分類であると言える。

表1 子ども観4分類の規定要因

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
子どもの性別	女兒	男児		女兒
子どもの成長※		特に成長が早い	成長が早い	
兄弟	兄弟あり		兄弟なし	
弟妹				弟妹あり
多胎児か否か				三つ子
祖父母との同居	祖父母と同居		祖父母と別居	
	(別居の場合、祖父母との行き来が頻繁であるほど調整志向)			
都市規模※	郡部		13大都市	
住居携帯	一戸建て		集合住宅	
母親の職業			母常勤	母主婦
父親の職種	父(母)職業威信低い	父(母)職業威信高い		
父母の収入		父母の収入高い		
父母の学歴	父母高卒以下	父母高等教育以上		父母高卒以下
父親の年齢		父40代以上		父30代
母親の年齢		母30代後半以上		母30代前半以下
回答者	母が回答	父が回答		母が回答

※印は、ロジスティック回帰分析では有意ではなかった

最も保守的な層が持つ厳格主義の「知性×調整」、学歴や業績を重視する一昔前の業績(学歴)主義の「知性×積極」、時代の最先端をいく層が持つもっとも進歩的な児童中心主義の「感性×積極」、若く小さい子どもの多い層によって担われる現代的な童心主義の「感性×調整」と分けられそうである。

### 1.3 本稿の課題

元森(2008)ではさらに、この分類を用いた分析事例として、しかり方(第4回問16「平成13年1/7月生まれのお子さんが悪いことをした場合どのように対応していますか」)に関する分析を行っている。それによれば、全体として分類ごとに大きな差異は見られないが、「知性」型、中でも「知性×調整」型は有無を言わず教え込む厳格なしかり方を採用やすく、「感性」型、中でも「感性×積極」型は子どもに理由を考えさせ、自分で判断できるようにする対話的なしかり方を採用しやすいということが明らかになった。これは、1.2で見た4分類の傾向とも親和的な結果である。

本稿では、この分析をさらに進め、出生～就学前に当たる第1回～第6回調査における、

子育てで「気をつけていること」や「意識していること」といった育児方針に関する項目の回答傾向が、4分類によってどう異なっているかを確認する。それによって、現代日本における子ども観の差異による育児方針の違いを具体的に浮かび上がらせる(2.)。

加えて、第6回「お手伝いをさせていること」と、第3回調査以降一貫して設問のある「習い事」に関する傾向を確認する。対象となる子どもが小学校に入学する第7回調査以降、学習や家庭生活にまつわる家族の教育行動を、子ども観との関係も含めて見ていくことが必要となってくると考えられる。それらのつながりうる作業として、就学前のお手伝いと習い事の傾向を子ども観の4分類ごとに確認する(3.)。

## 2. 子ども観と育児方針

### 2.1 育児方針の諸項目

ここで分析するのは、「子育てで意識して行っていること」(第1回問9)、「食事で気をつけていること」(第2回問4)、「おやつについて家庭で気をつけていること」(第3回問6)、「健康に関することで意識して行っていること」(第4回問13)、「遊びについて意識していること」(第5回問4)、「食事時に特に気をつけていること」(第6回問10)、の各項目である。子ども観を尋ねた第3回より前の調査の項目に関しては、第3回調査で子ども観に関する設問(問14)に答えたケースのみの分析となる。

総じて、先述の「しかり方」と同様、全体的な傾向は各分類とも共有しており、回答の全体的な傾向を覆すような大きな差異は見られない。後掲の諸図で確認できるとおり、家族は、子どもに対する配慮を様々に行っている。乳児期には「よく話しかける」(89.7%)「よくだっこする」(64.3%)などのコミュニケーションとスキンシップ、「生活リズムを崩さない」(54.1%)などの生活管理を「意識して」行い、食事では「色々な食品を食べさせる」(83.2%)、「決まった時間に食べさせる」(58.6%)、「健康や成長によくないものは食べさせない」(47.8%)など気をつける。健康面についても、「外から帰ったら手洗いをさせ」(79.6%)、「歯の仕上げ磨き」(78.7%)をする。また、食事の際には、「遊びながら食べない」(76.7%)、「あいさつをする」(72.8%)など様々なしつけを行っている。これらの項目では意識していることや気にしていることが「特にない」と答えた割合が10%以下と低く、多くの家族が何らかの配慮を子どもに対して行っていることになる。これらは、先述の近代家族研究のほか、アリエス(Aries1960=1980)、などに代表される近代子ども観の諸研究の知見を追認している。(おやつと遊びは、育児において副次的と見なされているのか、各項目の選択率が30%台以下のものが多く、「特にない」率も高い。)

しかし、選択率には一貫した差異が見られ、各分類の傾向はある。以下、詳細に見ていく。

## 2.2 子育てで意識して行っていること

第1回調査問9「子育てで意識して行っていることは何ですか」（問9）の回答傾向を子ども観の4分類ごとに見たのが表2である。項目ごとに、子ども観別の選択率に順位を透けている。また、項目ごとのクロス表で、残差の絶対値が1.97を超えるものを明示してある。（これらの点に関しては、以降のすべての図も同様。）

ほぼすべての項目で選択率が高いのが、「感性×積極」であり、「特に意識して行っていることはない」の選択率も最低である。「知性×調整」は、逆にほぼすべての項目で選択率が低く、「特に意識して行っていることはない」の選択率も高い。「知識×積極」は、「特に意識して行っていることはない」の選択率が最も高い一方、「よい音楽を聞かせる」「その他」などの選択率が「感性×積極」に次いで明らかに高く、意識は高いものと見られる。総じて、積極的な子どもになってほしいと望む層のほうが、色々なことを熱心に行っているようである。

表2 子ども観と子育てで意識して行っていること

	よく話しかける	よくだっこする	よい音楽をきかせる	外気浴をさせる	子どもの生活リズムをくずさない	その他	特に意識して行っていることはない	不詳	合計
知性×調整	10,181 ③ 89.5	7,160 ④ 62.9	1,874 ④ 16.5	5,527 ④ 48.6	6,077 ④ 53.4	1,408 ④ 12.4	650 ② 5.7	16 0.1	11,377 100.0
知性×積極	8,564 ④ 88.5	6,237 ② 64.4	1,978 ② 20.4	4,802 ③ 49.6	5,266 ② 54.4	1,508 ② 15.6	564 ① 5.8	26 0.3	9,681 100.0
感性×積極	9,753 ① 90.4	7,074 ① 65.6	2,235 ① 20.7	5,805 ① 53.8	5,880 ① 54.5	1,819 ① 16.9	486 ④ 4.5	22 0.2	10,789 100.0
感性×調整	9,881 ② 90.1	7,035 ③ 64.2	1,968 ③ 18.0	5,550 ② 50.6	5,918 ③ 54.0	1,596 ③ 14.6	567 ③ 5.2	20 0.2	10,962 100.0
合計	38,379 89.7	27,506 64.3	8,055 18.8	21,684 50.7	23,141 54.1	6,331 14.8	2,267 5.3	84 0.2	42,809 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

## 2.3 食事で気をつけていること

第2回調査問4「食事で気をつけていることについておたずねします」の回答傾向を子ども観の4分類ごとに見たのが表3である。「意識して行っていること」ほど一貫した傾向は見られないが、やはり「感性×積極」が、「色々な種類の食品を食べさせる」「子どもの健康や成長によくないものは食べさせない」「決まった時間に食べさせる」で選択率が高く、最も気を配っている。ただし、「子どもが嫌いなものでも食べさせる」「家族が揃った中で食べさせる」は明らかに選択率が低く、食べ物の種類や内容に気を配り、時間も管理するが、古典的なしつけは他のグループよりも熱心ではないと言える。逆に、それらの2点が高いのが「知識×調整」である。この傾向は、しかり方で見た傾向とも近いだろう。「感性×調整」が選択率が高いのは、「子どもが嫌いなものでも食べさせる」「子どもの健康や成長によくないものは食べさせない」であり、しつけよりも健康志向と考えられる。

なお、「知識×積極」が熱心なのは、「子どもが欲しい時に食べさせる」「その他」である。

表3 子ども観と食事で気をつけていること

	色々な種類の食品を食べさせる	子どもが好きなものを食べさせる	子どもが嫌いなものも食べさせる	多くの量を食べさせる	子どもの健康や成長によくはないものは食べさせない	決まった時間に食べさせる	子どもが欲しい時に食べさせる	家族が揃った中で食べさせる	その他	気をつけていることは特にない	不詳	合計
知性×調整	9,115 ③ 82.6	2,195 ④ 19.9	3,266 ① 29.6	1,658 ④ 15.0	4,780 ④ 43.3	6,399 ③ 58.0	987 ② 8.9	5,161 ① 46.7	641 ④ 5.8	222 ② 2.0	197 1.8	11,041 100.0
知性×積極	7,670 ④ 81.6	1,878 ③ 20.0	2,622 ③ 27.9	1,455 ① 15.5	4,498 ③ 47.9	5,443 ④ 57.9	848 ① 9.0	4,177 ③ 44.4	736 ② 7.8	191 ① 2.0	204 2.2	9,398 100.0
感性×積極	8,909 ① 84.8	2,165 ① 20.6	2,874 ④ 27.3	1,627 ② 15.5	5,382 ① 51.2	6,244 ① 59.4	866 ③ 8.2	4,561 ④ 43.4	862 ① 8.2	170 ④ 1.6	187 1.8	10,511 100.0
感性×調整	8,976 ② 83.8	2,205 ② 20.6	3,146 ② 29.4	1,627 ③ 15.2	5,271 ② 49.2	6,323 ② 59.0	847 ④ 7.9	4,879 ② 45.5	802 ③ 7.5	177 ③ 1.7	176 1.6	10,712 100.0
合計	34,670 83.2	8,443 20.3	11,908 28.6	6,367 15.3	19,931 47.8	24,409 58.6	3,548 8.5	18,778 45.1	3,041 7.3	760 1.8	764 1.8	41,662 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

## 2.4 おやつについて家庭で気をつけていること

第3回調査問6の「おやつについて家庭で気をつけていることはありますか」の回答傾向を子ども観の4分類ごとに見たのが表4である。

ここでも、気をつけていることが最も多いのは「感性×積極」グループであり、少ないのは「知性×調整」グループという傾向が確認される。唯一「時間を決めてる」のみが逆転している。先述の食事の項目と一致しているわけではなく、理由はわからない。「知性×積極」は、「手作りのものにしてる」の選択率が高い。全体としては、積極志向の子ども観を持つほうが、おやつに関しては気をつけていると言えよう。

表4 子ども観とおやつについて家庭で気をつけていること

	時間を決めてる	甘いものは少なくするようにしている	栄養に注意している	手作りのものにしてる	その他	特に気をつけていることはない	不詳	合計
知性×調整	4,251 ① 37.4	4,033 ④ 35.4	1,196 ④ 10.5	459 ④ 4.0	767 ④ 6.7	3,707 ① 32.6	69 0.6	11,377 100.0
知性×積極	3,527 ③ 36.4	3,613 ③ 37.3	1,175 ② 12.1	534 ① 5.5	847 ② 8.7	2,950 ② 30.5	90 0.9	9,681 100.0
感性×積極	3,896 ④ 36.1	4,170 ① 38.7	1,392 ① 12.9	568 ② 5.3	1,006 ① 9.3	3,143 ④ 29.1	85 0.8	10,789 100.0
感性×調整	4,092 ② 37.3	4,100 ② 37.4	1,291 ③ 11.8	495 ③ 4.5	880 ③ 8.0	3,329 ③ 30.4	76 0.7	10,962 100.0
合計	15,766 36.8	15,916 37.2	5,054 11.8	2,056 4.8	3,500 8.2	13,129 30.7	320 0.7	42,809 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

## 2.5 健康に関することで意識して行っていること

第4回問13「健康に関することでどのようなことを意識して行っていますか」の回答傾向を子ども観の4分類ごとに見たのが表5である。

一般的に選択率が高いのは、「感性×積極」「感性×調整」の「感性」派である。「感性×積極」は、「歯の仕上げ磨きをする」「たばこの煙を吸わせないようにする」という親の自覚的な関与が必要な項目や、「早寝早起きをさせる」「なるべく外で遊ばせる」「体をよく動かす遊びをさせる」「その他」と健康で元気な子どもへの志向を示す項目で選択率が高い。

「感性×調整」は、「外から帰ったら手洗いをさせる」「早寝早起きをさせる」「たばこの煙を吸わせないようにする」「室内を清潔に保つ」で選択率が高く、衛生面への関心が高いと考えられる。「知性×積極」は「外から帰ったらうがいをする」「外から帰ったら手洗いをさせる」「歯の仕上げ磨きをする」という衛生面への関心は他に比べて低く、「体をよく動かす遊びをさせる」を重視している。「知性×調整」は、「外から帰ったらうがいをする」のみ高く、「感性×積極」で高かった諸項目は逆に低い。

幅広く気を配る「感性×積極」、衛生面重視の「感性×調整」、元気な子ども志向の「知性×積極」とまとめられよう。

表5 子ども観と健康に関することで意識して行っていること

	厚着をさせない	食事の前の手洗いをさせる	外から帰ったら手洗いをさせる	外から帰ったらうがいをさせる	歯の仕上げ磨きをする	早寝早起きをさせる	たばこの煙を吸わせないようにする	なるべく外で遊ばせる
知性×調整	2,731	3,638	8,500	4,773	8,225	4,497	2,823	3,082
③	25.4	② 33.8	③ 79.0	① 44.3	④ 76.4	③ 41.8	④ 26.2	④ 28.6
知性×積極	2,421	3,149	7,153	3,797	7,093	3,959	2,589	3,032
①	26.5	① 34.4	④ 78.2	④ 41.5	③ 77.5	② 43.3	③ 28.3	② 33.1
感性×積極	2,647	3,452	8,188	4,313	8,214	4,513	3,150	3,677
②	25.9	③ 33.7	② 80.0	③ 42.1	② 80.3	① 44.1	① 30.8	① 35.9
感性×調整	2,651	3,494	8,486	4,553	8,423	4,353	3,147	3,429
④	25.3	④ 33.4	① 81.1	② 43.5	① 80.5	④ 41.6	② 30.1	③ 32.8
合計	10,450	13,733	32,327	17,436	31,955	17,322	11,709	13,220
	25.7	33.8	79.6	42.9	78.7	42.6	28.8	32.5

(つづき)

	体をよく動かす遊びをさせる	室内を清潔に保つ	その他	特に意識して行っていることはない	不詳	合計
知性×調整	2,879	4,363	385	363	29	10,764
④	26.7	③ 40.5	④ 3.6	① 3.4	0.3	100.0
知性×積極	2,792	3,698	458	279	33	9,151
②	30.5	④ 40.4	② 5.0	② 3.0	0.4	100.0
感性×積極	3,242	4,193	525	230	19	10,234
①	31.7	② 41.0	① 5.1	④ 2.2	0.2	100.0
感性×調整	2,991	4,465	426	262	12	10,466
③	28.6	① 42.7	③ 4.1	③ 2.5	0.1	100.0
合計	11,904	16,719	1,794	1,134	93	40,615
	29.3	41.2	4.4	2.8	0.2	100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とし

## 2.6 遊びについて意識していること

第5回調査問4「遊びについて意識していることはありますか」の回答傾向を子ども観の4分類ごとに見たのが表6である。

「感性×積極」が「子ども同士で遊ばせること」以外のすべての項目で1位であり、選択率が明らかに高い。「知性×調整」は、すべての項目で最も選択率が低くなっている。それ以外に関しては、健康、衛生、自然志向の「感性×調整」、体力重視の「知性×積極」という傾向が見られるが、残差の絶対値が1.97を超えるような明らかな差異は見られない。

表6 子ども観と遊びについて意識していること

	屋外で遊ばせること	体を動かす遊びをさせること	いろいろな遊びをさせること	好きな遊びをさせること	子ども同士で遊ばせること	家族で遊ぶこと	その他	意識していることは特にない	不詳	合計
知性×調整	4,516 ④ 43.5	4,392 ④ 42.3	4,478 ④ 43.1	3,842 ④ 37.0	5,254 ④ 50.6	2,904 ④ 27.9	315 ④ 3.0	2,065 ① 19.9	21 0.2	10,392 100.0
知性×積極	4,117 ③ 46.5	4,040 ② 45.7	3,926 ② 44.4	3,335 ③ 37.7	4,572 ③ 51.7	2,520 ③ 28.5	337 ② 3.8	1,528 ③ 17.3	23 0.3	8,846 100.0
感性×積極	4,886 ① 49.3	4,642 ① 46.9	4,482 ① 45.2	3,915 ① 39.5	5,157 ② 52.0	3,025 ① 30.5	422 ① 4.3	1,552 ④ 15.7	20 0.2	9,908 100.0
感性×調整	4,722 ② 46.9	4,503 ③ 44.7	4,384 ③ 43.6	3,839 ② 38.1	5,274 ① 52.4	3,017 ② 30.0	345 ③ 3.4	1,798 ② 17.9	20 0.2	10,066 100.0
合計	18,241 46.5	17,577 44.8	17,270 44.0	14,931 38.1	20,257 51.7	11,466 29.2	1,419 3.6	6,943 17.7	84 0.2	39,212 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

## 2.7 食事時に特に気をつけていること

第6回調査問10「食事時に、特に気をつけていることは何ですか」の回答傾向を子ども観の4分類ごとに見たのが表7である。この設問は、先に見た第2回問4の「食事で気をつけていること」とは異なり、いわゆる食事に関するしつけに関する設問である。

今まで見た育児方針の各項目とは様子が異なっており、「感性×積極」グループの選択率は全体的に低めである。全体的には、「感性×調整」「知性×調整」の「調整」派の方が選択率が高く、食事のしつけにはより熱心であると言える。「あいさつする」「食べ物を粗末にしない」「遊びながら食べない」「残さず食べる」「食事中に席を立たない」などの基本的な食事のしつけは「感性×調整」が1位であり、「食べているときの姿勢」「お茶碗の持ち方」といったより外面的な部分のしつけは「知性×調整」が1位である。「テレビをつけない」は「感性×積極」の選択率が高い。

外見的なしつけほど「知性×調整」、全般的には「感性×調整」がしつけに熱心と言える。

表7 子ども観×食事時に特に気をつけていること

	あいさつする「いただきます」「ごちそうさま」	食べているときの姿勢	お茶碗やはしの持ち方	食べ物を粗末にしない	遊びながら食べない	残さず食べる	食事中に席を立たない	テレビをつけない	合計
知性×調整	7,410 ② 74.1	6,646 ① 66.4	5,191 ① 51.9	6,489 ② 64.9	7,718 ② 77.1	5,591 ② 55.9	5,787 ③ 57.8	2,670 ④ 26.7	10,005 100.0
知性×積極	5,987 ④ 70.5	5,502 ③ 64.8	4,346 ② 51.2	5,254 ④ 61.8	6,428 ④ 75.7	4,580 ③ 53.9	4,946 ② 58.2	2,543 ② 29.9	8,496 100.0
感性×積極	6,841 ③ 71.5	6,149 ④ 64.3	4,583 ④ 47.9	6,129 ③ 64.1	7,272 ③ 76.0	5,136 ④ 53.7	5,522 ④ 57.7	3,068 ① 32.1	9,568 100.0
感性×調整	7,293 ① 74.7	6,397 ② 65.5	4,857 ③ 49.7	6,729 ① 68.9	7,585 ① 77.7	5,491 ① 56.2	5,788 ① 59.3	2,799 ③ 28.7	9,765 100.0
合計	27,531 72.8	24,694 65.3	18,977 50.2	24,601 65.0	29,003 76.7	20,798 55.0	22,043 58.3	11,080 29.3	37,834 100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

## 2.8 小括

以上の分析からは、ある程度一貫した傾向が読み解けよう。育児方針——子育てで意識して行っていること、気をつけていること——において、子どもに対する配慮が手薄なのが「知性×調整」グループである。しかし、このグループは、食事の際のしつけなど、より「伝統的」<sup>3</sup>な項目では選択率が高くなっている。「知性×積極」グループは、いろいろな配慮をし、子どもにはよく体を動かすことを望んでいる。「感性×調整」グループは、衛生面や健康面に配慮し、家族とのコミュニケーションを重視している。この2つの傾向を併せ持ち、子どもに対して特に配慮をしているのは「感性×積極」グループである。上記の「伝統的」な項目を除いたほとんどすべての項目で、高い選択率を示している。また、このグループは「好きな遊びをさせる」「子どもが好きなものを食べさせる」<sup>4</sup>といった子どもの自発的な嗜好を優先する志向性も強い。

これらの結果は、冒頭にあげた、厳格主義、業績主義、児童中心主義、童心主義という既存の子ども観研究にひきつけた各グループの解釈を支持していよう。ついで、お手伝いさせていることとさせている習い事から、教育行動について考える。

## 3. 子ども観と教育行動

### 3.1 お手伝いをさせていること

第6回問11では、「平成13年1月/7月生まれのお子さんに、次のようなお手伝いをさせていますか」と、お手伝いについて尋ねている。その傾向を子ども観ごとに示したのが、表8である。

<sup>3</sup> ここでの「伝統」には鍵括弧がつく。子どもやマナーに関する「伝統」自体が、近代的なものだからである。

<sup>4</sup> 者は残差1.97未満である。



表8 子ども観とお手伝いさせていること

	掃除	新聞や手紙などを取ってくる	買い物の荷物を持つ	洗濯物をたたむ	食卓に食器を並べる、片付ける	動物や植物の世話をする	弟や妹の面倒を見る	おつかい	合計
知性×調整	4,020	3,492	4,743	4,300	7,609	2,535	3,345	768	9,724
②	41.3	① 35.9	② 48.8	① 44.2	① 78.2	④ 26.1	④ 34.4	④ 7.9	100.0
知性×積極	3,341	2,945	3,998	3,568	6,197	2,272	2,876	676	8,220
④	40.6	② 35.8	③ 48.6	③ 43.4	④ 75.4	③ 27.6	③ 35.0	③ 8.2	100.0
感性×積極	3,858	3,168	4,493	3,861	7,006	2,773	3,637	772	9,288
①	41.5	④ 34.1	④ 48.4	④ 41.6	③ 75.4	① 29.9	② 39.2	② 8.3	100.0
感性×調整	3,906	3,317	4,708	4,167	7,341	2,781	3,752	793	9,486
③	41.2	③ 35.0	① 49.6	② 43.9	② 77.4	② 29.3	① 39.6	① 8.4	100.0
合計	15,125	12,922	17,942	15,896	28,153	10,361	13,610	3,009	36,718
	41.2	35.2	48.9	43.3	76.7	28.2	37.1	8.2	100.0

※○数字は、その項目ごとの順位(%)

※ クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

買い物の荷物を持つ」「洗濯物をたたむ」「食卓に食器を並べ片づける」は、「知性×調整」「感性×調整」の「調整」派の選択率が高く、「動物や植物の世話をする」「弟や妹の面倒を見る」「おつかい」は「感性×積極」「感性×調整」の「感性」派の選択率が高い。「新聞や手紙などをとってくる」は、「知性」派の選択率が高い。

いわゆる家事の手伝いは、「知性×調整」を中心とした「調整」派、世話や面倒といったコミュニケーションや情緒に結びつくお手伝いは「感性」派と言ったところだろうか。

### 3.2 習い事

第3回調査から第6回調査には、「平成13年1月/7月生まれのお子さんは現在、習い事をしていますか」という設問がある。習い事をしているケースの各回のケース全体に対する比率の子ども観の分類ごとの変化を、習い事の項目ごとに見たのが図2～図12である。調査回によって傾向が逆転することもあるが、概ね、一貫した傾向が見られる。

- ・ 幼児教室 (図2) : 「知識×積極」が多く、「感性×積極」がそれに次ぐ。「知性×調整」はそれほど熱心ではない。
- ・ 入園・入学のための学習塾 (図3) : 「知識×積極」が他のグループより多い。
- ・ そろばん (図4) : 第6回で、「知識×積極」が多く、「知識×調整」がそれに次ぐという傾向が現れる。
- ・ 習字 (図5) : 「感性×積極」が他のグループより少ない。
- ・ 音楽 (ピアノなど) (図6) : 「感性×積極」が多く、「知識×積極」がそれに次ぐ。「知性×調整」は少ない。
- ・ 絵・工作 (図7) : 「知識×調整」は常に少ない。第1回のみ「感性×積極」が高い。第5,6回では、「知識×積極」が多く、「知性×調整」に加え、「感性×調整」も少ない。
- ・ 体操 (図8) : 「感性×積極」が多く、「知性×積極」がそれに次ぐ。「知性×調整」は第

5 階を除いて、「感性×調整」は第 1 回を除いて低く、積極派>調整派の傾向が見られる。

- ・ バレエ (図 9) : 第 5 回より「感性×積極」が多く、「知性×調整」が少ない。
- ・ 水泳 (図 10) : 「感性×積極」および「知性×積極」の「積極」派が多い。「知性×調整」は少ない。
- ・ 英語 (図 11) : 「知性×積極」、「感性×積極」が多く、「知性×調整」は少ない。
- ・ その他 (図 12) : 「感性×積極」が多く、「知性×調整」が少ない。

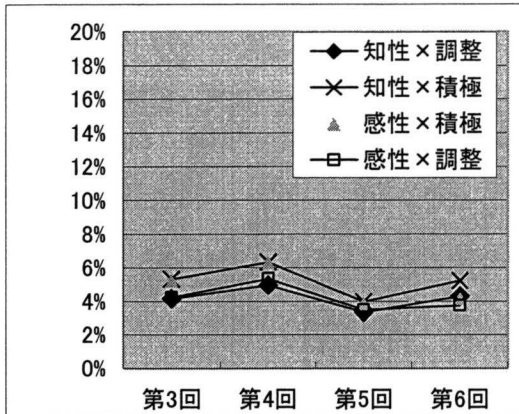
以上からは、全的な傾向としては、「感性×積極」、「知性×積極」の「積極」派がより熱心に習い事をさせていることがわかる。最も習い事をさせていないのが「知識×調整」となる。

「知識×積極」がより多いのは、「幼児教室」「入園・入学のための学習塾」「そろばん」「絵・工作」「英語」といった主に知育に関わるものであり、「感性×積極」がより多いのは、「音楽」「バレエ」「その他」などの情操教育に関する項目である<sup>5</sup>。また、「体操」「水泳」は「知識×積極」「感性×積極」のどちらがより多いか判断しがたい。さらに、「習字」と「そろばん」といういわゆる古いタイプの習い事に関しては、「感性×積極」は熱心でない。

---

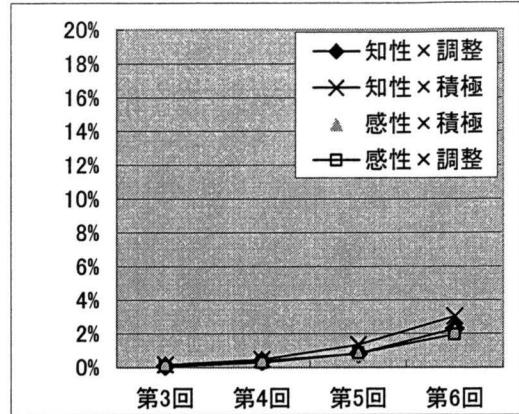
<sup>5</sup> この差異には、「知性」型に男児が多く「感性」型に女児が多いというジェンダーの要因が関係している可能性がある。なお、第 7 回以降は、野球やサッカーといった、現代的な男の子の習い事の項目が加わっている。

図2 習い事の変化（幼児教室）



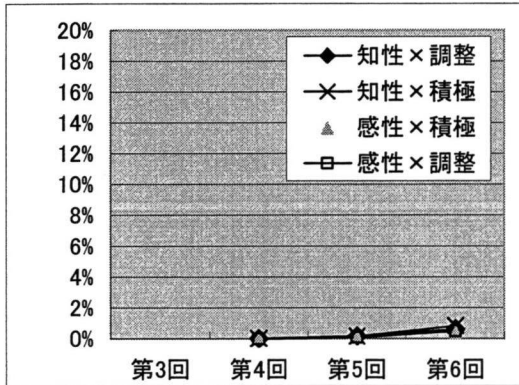
知性. 調整	4.2%	5.0%	3.4%	4.3%
知性. 積極	5.3%	6.3%	4.0%	5.2%
感性. 積極	5.2%	6.3%	3.9%	4.1%
感性. 調整	4.2%	5.4%	3.5%	3.8%

図3 習い事の変化（入園・入学のための学習）



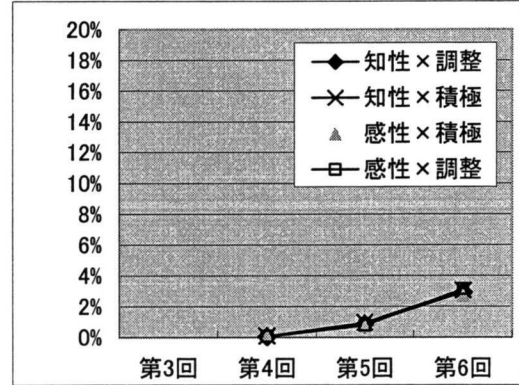
知性. 調整	0.1%	0.4%	0.8%	2.3%
知性. 積極	0.2%	0.5%	1.4%	3.1%
感性. 積極	0.1%	0.3%	0.7%	2.1%
感性. 調整	0.1%	0.3%	0.9%	2.0%

図4 習い事の変化（そろばん）



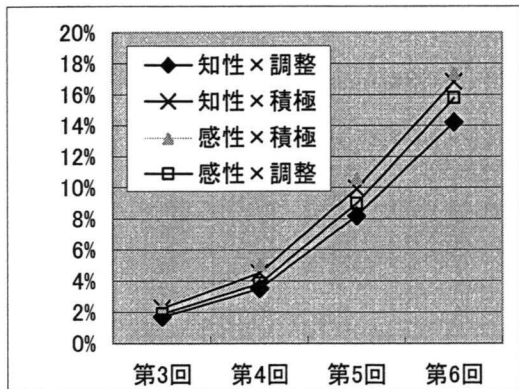
知性. 調整	0.0%	0.2%	0.6%
知性. 積極	0.0%	0.2%	0.8%
感性. 積極	0.0%	0.1%	0.4%
感性. 調整	0.0%	0.1%	0.5%

図5 習い事の変化（習字）



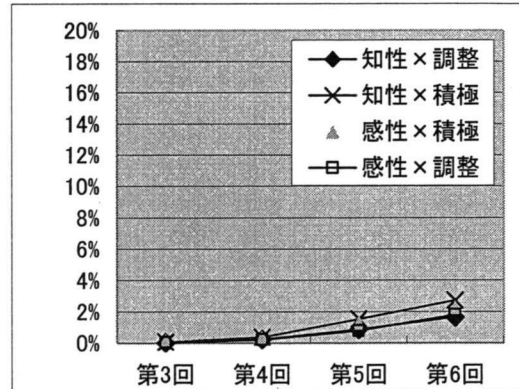
知性. 調整	0.1%	0.9%	2.9%
知性. 積極	0.1%	1.0%	3.1%
感性. 積極	0.1%	0.7%	2.7%
感性. 調整	0.1%	0.8%	3.1%

図6 習い事の変化（音楽（ピアノなど））



知性. 調整	1.7%	3.5%	8.2%	14.2%
知性. 積極	2.3%	4.5%	10.0%	16.8%
感性. 積極	2.4%	5.0%	10.6%	17.3%
感性. 調整	1.9%	3.9%	9.0%	15.8%

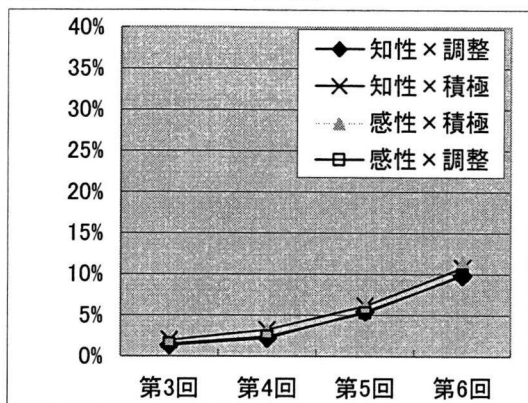
図7 習い事の変化（絵・工作）



知性. 調整	0.0%	0.3%	0.9%	1.7%
知性. 積極	0.1%	0.4%	1.5%	2.7%
感性. 積極	0.1%	0.3%	1.3%	2.3%
感性. 調整	0.1%	0.2%	0.8%	1.8%

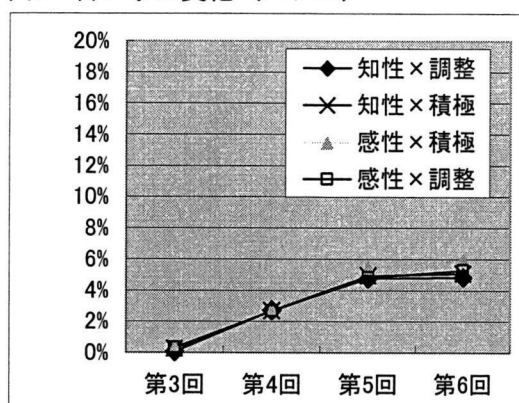
※ 図2～7すべてにおいて、クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

図8 習い事の変化（体操）



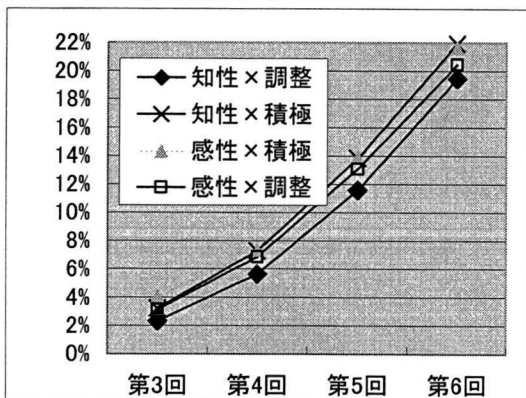
知性. 調整	1.4%	2.2%	5.5%	9.8%
知性. 積極	<b>2.0%</b>	<b>3.2%</b>	6.2%	10.8%
感性. 積極	<b>2.1%</b>	<b>3.1%</b>	<b>6.2%</b>	<b>11.4%</b>
感性. 調整	1.5%	2.4%	5.3%	10.0%

図9 習い事の変化（バレエ）



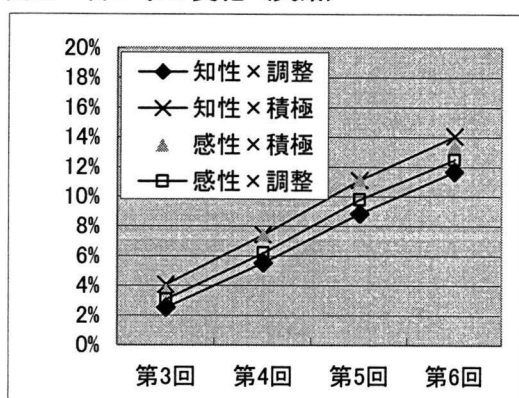
知性. 調整	0.1%	2.7%	4.8%	4.9%
知性. 積極	0.3%	2.7%	5.0%	5.1%
感性. 積極	0.3%	2.7%	<b>5.5%</b>	<b>5.9%</b>
感性. 調整	0.3%	2.7%	4.8%	5.3%

図10 習い事の変化（水泳）



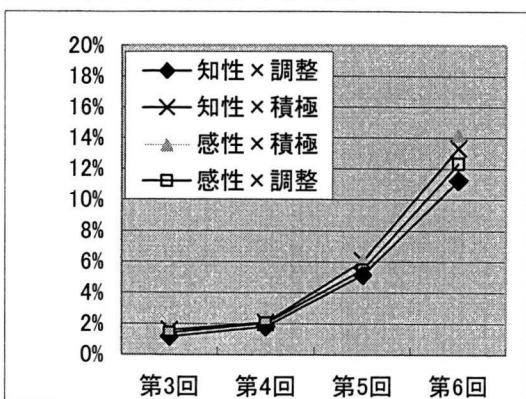
知性. 調整	2.3%	5.7%	11.6%	19.5%
知性. 積極	3.2%	<b>7.3%</b>	<b>13.8%</b>	<b>21.9%</b>
感性. 積極	<b>4.0%</b>	<b>7.3%</b>	<b>13.9%</b>	<b>21.6%</b>
感性. 調整	3.1%	6.9%	13.1%	20.5%

図11 習い事の変化（英語）



知性. 調整	2.5%	5.6%	8.8%	11.7%
知性. 積極	<b>4.1%</b>	<b>7.4%</b>	<b>11.1%</b>	<b>14.1%</b>
感性. 積極	<b>3.7%</b>	<b>7.4%</b>	<b>11.1%</b>	<b>13.4%</b>
感性. 調整	3.1%	6.2%	9.8%	12.5%

図12 習い事の変化（その他）



知性. 調整	1.2%	1.8%	5.2%	11.3%
知性. 積極	1.6%	2.1%	6.1%	13.3%
感性. 積極	<b>1.7%</b>	<b>2.4%</b>	<b>6.1%</b>	<b>14.2%</b>
感性. 調整	1.4%	2.1%	5.5%	12.3%

※ 図8～12すべてにおいて、クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

### 3.3 小括

お手伝いと習い事から、子ども観ごとの教育行動の違いを見ると、次のように言えるだろう。「知性×調整」は、いわゆる家事手伝いを重視し、習い事には、「そろばん」を除けば、他のグループに比べて積極的ではない。「知性×積極」は、お手伝いは他のグループに比べて熱心ではなく、知育系を中心に、習い事に比較的熱心である。「感性×積極」は、家事手伝いには比較的熱心ではないが、コミュニケーションや情緒に関するお手伝いは積極的にさせている。情操系の習い事を中心に、習い事にも比較的熱心である。「感性×調整」は、お手伝いはどのタイプのものも比較的させている。習い事は、「知性×調整」グループよりはやらせている。

これらの結果は、2.同様、冒頭にあげた、厳格主義、業績主義、児童中心主義、童心主義という既存の子ども観研究にひきつけた各グループの解釈を支持していよう。別の言い方をすれば、子ども観の各グループは、積極／調整、知性／感性という子ども観の分類の際に名づけた軸の名前を見事に反映したような、育児方針と教育行動をとっているのである。もちろん、全体的な回答傾向はグループごとに大きな差異はなく、このような傾向は、わずかな選択率の高低の違いとして現れているにすぎないことにも注意が必要である。しかし、同時に、子どもに対するまなざしが実際の子育てにおける意識や行動の差異と関連しているということを、実際のデータから確認できたということは、やはり重要である。

## 4. 今後の課題

今回分析したのは、分析すべき項目の未だ一部にすぎない。TV視聴のあり方や睡眠時間（時刻）などの基本的な生活習慣に関するしつけの方針や実態を子ども観との関係で見えていくこともできよう。また、父母が子どもと一緒に過ごす時間など、より直接的な父母の子どもへの接し方に関する項目も検討が必要である。

しかし、それ以上に重要なのは、繰り返すように、対象となる子どもが小学校に入学する第7回調査以降の教育行動の分析である。乳幼児期への子どもへの様々な配慮のあり方の分析と併せて、学習・教育といった局面でどのような子ども観を持った家族がどのような行動をとっているのかを見ていくことが、『出生児縦断調査』を子ども観の分析の素材としていく際の重要なポイントとなるだろう。

加えて、近代家族の子ども観の研究においては、「教育家族」に代表されるような子どもに対して高度な配慮をする子育てのあり方が、育児不安や負担感につながっているという指摘や、少なく産んでしっかり育てる少産化傾向につながっているという指摘もある（沢山1987など）。『出生児縦断調査』では、毎年「平成13年1月／7月生まれのお子さんを育ててよかったこと」と「負担に思うこと」を尋ねている。子ども観とこれらの育児に関する意識の関係なども見ていくことも重要な課題である。

なお、ここで「子ども観」と述べてきたのは、回答者である父母らが抽象的に抱いてい

るものではないということにも注意が必要である。回答は、あくまでも「平成13年1月／7月生まれのお子さんはどのような子に育てて欲しいと思いますか」という設問に対する解答であり、対象となる子どもの個性に関わらず一貫した子ども像を回答したケースもあれば、その子どもの特性を考慮した回答をしたケースもありうる。第4回には、子ども自身の性格を尋ねており（問11「平成13年1月／7月生まれのお子さんは現在どのような性格だと思いますか」）、それと子ども観の関係を見ていくこと——性格に沿った子ども像を期待しているのか、性格とは逆の子ども像を期待しているのか、実際の子どもの性格とは比較的独立した理想としての子ども像を答えているのか——なども必要であろう。このような点を整備していけば、親の教育戦略が、子どもの行動や能力によって変化していく様も見ていくことができるかもしれない。

## 文献

Aries, Philippe 1960 *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Regime*, Editions du Seuil, (=1980 杉山光信・杉山恵美子訳『<子供>の誕生』みすず書房)。

Dewey, John [1899]1990 "The School and the Society" *The School and the Society and the Child and the Curriculum*, University of Chicago Press, (=1998 市村尚久訳『学校と社会・子どもとカリキュラム』講談社)。

広田照幸 1999『日本人のしつけは衰退したか：「教育する家族」のゆくえ』講談社。

元森絵里子 2008「出生児縦断調査」による子ども観の分析に向けて——「どのような子に育てて欲しいか」の分類および規定要因分析——『パネル調査（縦断調査）に関する総合的分析システムの開発研究』（平成19年度厚生労働科学研究費補助金統計情報総合研究事業報告書）。

沢山美果子 1987「〈童心〉主義子ども観の展開：都市中間層における教育家族の誕生」『保育幼児教育体系5 保育の思想』労働旬報社

沢山美果子 1990「教育家族の成立」中内敏夫他『教育：誕生と終焉』藤原書店。

## 2 1 子ども観と育児方針 2

### ——第 1 回～第 6 回「出生児縦断調査」の分析より——

元森 絵里子

#### 1. 本稿の目的と前年度、前々年度報告書の概要

##### 1.1 子ども観の 4 分類とその規定要因

筆者は、前年度、前々年度報告書において、「21 世紀出生児縦断調査」（以下、出生児調査）の第 3 回問 14「平成 13 年 1 月／7 月生まれのお子さんとはどのような子に育てて欲しいと思いますか。次のうち、特に重視したいもの 5 つまでを選んでその番号に○をつけてください」という設問<sup>1</sup>の回答傾向を用いて、全ケースを 4 つの子ども観を持つグループに分け、それぞれの属性や育児方針や教育行動の違いを分析してきた（元森 2008、2009）。

グループ分けは、SPSS を用いたコレスポネンス分析で析出された 2 軸を元に行った。第 1 軸は、他者との協調や調整的な行動を支持する傾向と、自発的で積極的な行動を支持する傾向（調整－積極軸）、第 2 軸は、知性を重視する傾向と感性を重視する傾向（知性－感性軸）からなると解釈でき、それによってできる 4 グループは、子ども観研究が明らかにした「近代的子ども観」に照らし合わせて、図 1 のようにも見なすことができる。

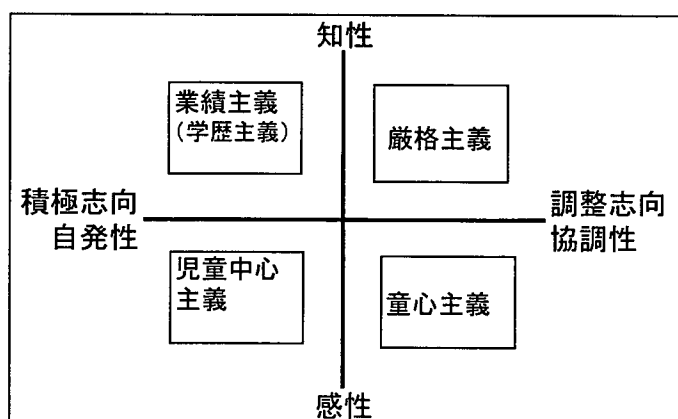


図 1 「出生児縦断調査」における子ども観の 4 分類

すなわち、「調整・協調」かつ「知性」を重視する第 1 象限は、道徳・しつけに関する知を重視する厳格主義、「積極・自発」かつ「知性」を重視する第 2 象限は、子ども自身によ

<sup>1</sup> 選択肢は、「思いやりのある子ども」「じょうぶなからだの子ども」「命あるものを大切にする子ども」「正直な子ども」「自分の思うことをはっきり言える子ども」「物を大切にする子ども」「感性豊かな子ども」「礼儀正しい子ども」「人の話をよく聞く子ども」「よく考えて行動する子ども」「好奇心の旺盛な子ども」「自然が好き子ども」「正義感の強い子ども」「その他」の 15 項目である。

る知識の獲得を強調する学歴主義（より一般的な言い方をすれば業績主義）、「積極・自発」かつ「感性」を重視する第3象限は、何事においても子どもの自発性と感性を重視する児童中心主義、「調整・強調」かつ「感性」を重視する第4象限は、周囲に調和した子どもらしさを重視する童心主義と言い換えられることになる。

元森（2008）では、その規定要因を家族の属性や子ども側の要因に探っているのので、その結果をまとめた形で表1に再掲する。それによれば、「知性×調整」（厳格主義）は、保守的ないし階層的に劣位と見られる層、「知性×積極」（業績(学歴)主義）は、エリートで父母の年齢が高めの層、「感性×積極」（児童中心主義）は、それにくわえて都市部で母親が常勤職など時代の先端をいく層、「感性×調整」（童心主義）は、専業主婦家庭で若く小さい子どもの多い層に、それぞれ多く見られるということがわかる。

表1 子ども観4分類の規定要因

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
子どもの性別	女兒	男兒		女兒
子どもの成長*		特に成長が早い	成長が早い	
兄弟	兄弟あり		兄弟なし	
弟妹				弟妹あり
多胎児か否か				三つ子
祖父母との同居	祖父母と同居		祖父母と別居	
	(別居の場合、祖父母との行き来が頻繁であるほど調整志向)			
都市規模*	郡部		13大都市	
住居携帯	一戸建て		集合住宅	
母親の職業			母常勤	母主婦
父親の職種	父(母)職業威信低い	父(母)職業威信高い		
父母の収入		父母の収入高い		
父母の学歴	父母高卒以下	父母高等教育以上		父母高卒以下
父親の年齢		父40代以上		父30代
母親の年齢		母30代後半以上		母30代前半以下
回答者	母が回答	父が回答		母が回答

※\*印は、ロジスティック回帰分析では有意ではなかった

この結果を元に、さらに大胆に現代の子ども観の4種類を描き出してしまえば、図2のようになるかもしれない。

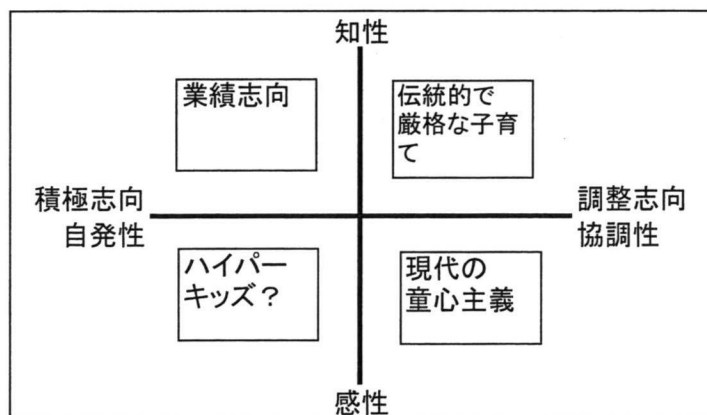


図2 「出生児縦断調査」における子ども観の4分類



## 1.2 子ども観と育児方針・教育行動

この4分類を用いて、さらに、元森（2008）では、しつけの仕方としてのしかり方（第4回問16「お子さんが悪いことをした場合のように対応していますか」）について、元森（2009）では、主に意識・配慮していることといった育児方針（第1回問9「子育てで意識して行っていること」、第2回問4「食事で気をつけていること」、第3回問6「おやつについて家庭で気をつけていること」、第4回問13「健康に関することで意識して行っていること」、「第5回問4遊びについて意識していること」、第6回問10「食事時に特に気をつけていること」と、教育行動（第6回問11「お子さんに、次のようなお手伝いをさせていますか」、第3回～第6回の「お子さんは現在、習い事をしていますか」）の傾向の違いを分析している。その概要をまとめたのが、表2である。

表2 子ども観としかり方・育児方針・教育行動

	知性×調整	知性×積極	感性×積極	感性×調整
お子さんが悪いことをしたときの対応(4-16)	有無を言わず教え込む厳格なしつけの傾向	やや厳格なしつけ	対話的で考えさせるしつけの傾向	やや対話的なしつけ
子育てで意識して行っていること【情操教育】(1-9)	すべてに意識が高くない傾向	それなりに意識あり	すべてに意識が高い傾向	
食事で気をつけていること【時間や栄養など】(2-4)	古典的なしつけに熱心な傾向		健康や好みに気を配るが古典的なしつけは抑え目の傾向	しつけより健康志向
おやつについて家庭で気をつけていること(4-13)	気をつけていない傾向	手作りなどやや気をつけている	全体的に気をつけている(時間はルーズ)	
健康に関することで意識して行っていること(4-13)	親の関与や健康で元気な子ども志向が弱い傾向	元気に動く子どもを志向する傾向	親の自覚的な関与と健康で元気な子どもを志向する傾向	衛生面への関心が高い傾向
遊びについて意識していること(5-4)	すべてで意識が高くない傾向	体力重視の傾向	ほぼすべてに意識が高い傾向	健康・衛星・自然志向の傾向
食事時に特に気をつけていること【食事中のマナーのしつけ】(6-10)	食事の仕方など外面的なしつけに熱心な傾向		全体的に意識が高くない傾向	基本的な食事のしつけに熱心な傾向
お手伝いさせていること(6-11)	いわゆる家事の手伝い重視の傾向	全体的に熱心でない傾向	コミュニケーションや情緒に結びつくお手伝い重視の傾向	家事の手伝い重視+コミュニケーション・情緒重視の傾向
習い事(第3回～第6回)	そろばん以外では熱心ではない傾向	知育に熱心	情操教育に熱心	古典的な習い事(習字・そろばん)には熱心ではない傾向

しつけでは、全体として分類ごとに大きな差異は見られないが、「知性」グループ、中でも「知性×調整」は有無を言わず教え込む厳格なしかり方を採用やすく、「感性」グループ、中でも「感性×積極」は子どもに理由を考えさせ、自分で判断できるようにする対話的なしかり方を採用しやすいということが明らかになった。

育児方針においては、「知性×調整」グループは、全般的に他のグループより選択率が低

い一方、食事の際のしつけなど、より「伝統的な」（子どもやマナーに関する「伝統」自体が、近代的なものであるが）項目では選択率が高くなっている。「知性×積極」グループは、いろいろな配慮をし、子どもにはよく体を動かすことを望んでいる。「感性×調整」グループは、衛生面や健康面に配慮し、家族とのコミュニケーションを重視している。この2つの傾向を併せ持ち、子どもに対して特に配慮をしているのは「感性×積極」グループである。上記の「伝統的」な項目を除いたほとんどすべての項目で、高い選択率を示している。また、このグループは「好きな遊びをさせる」「子どもが好きなものを食べさせる」といった子どもの自発的な嗜好を優先する志向性も強い。

教育行動では、「知性×調整」は、いわゆる家事手伝いを重視し、習い事には、「そろばん」を除けば、他のグループに比べて積極的ではない。「知性×積極」は、お手伝いは他のグループに比べて熱心ではなく、知育系を中心に、習い事に比較的熱心である。「感性×積極」は、家事手伝いには比較的熱心ではないが、コミュニケーションや情緒に関するお手伝いは積極的にさせている。情操系の習い事を中心に、習い事にも比較的熱心である。「感性×調整」は、お手伝いはどのタイプのものも比較的させている。習い事は「知性×調整」グループよりはやらせている。

これらの結果は、各グループは、厳格主義、業績主義、児童中心主義、童心主義というラベルを見事に反映したような、育児方針と教育行動をとっているということの意味していた。（もちろん、全体的な回答傾向はグループごとに大きな差異はなく、このような傾向は、わずかな選択率の高低の違いにすぎないことにも注意が必要である。）

以上が過去2年間の報告書の分析であるが、対象児が就学前にあたる第6回調査までも、まだ分析すべき項目はいくつもある。そこで、本報告書では、第一に、しかり方や育児方針、教育行動の分析を補うものとして、父母の子へのコミュニケーションとしつけ、テレビの見方への関わり方について分析し、子ども観の分析に厚みを加えることを試みる(2)。これらにより、前年度の分析を補い、子ども観の子育てへの影響をより深く検証する。ついで、第二に、しつけや育児方針、教育行動の結果、子どもがどのように育っているかを見るために、しつけの習得、テレビやゲームの時間、睡眠時間、基本的な生活習慣、遊び、子の父母へのコミュニケーション、情動面や社会性の発達に関する項目の分析を行う(3)。それにより、子ども観の効果をより多角的に描き出す。最後に、視角を変えて、補論として、子ども観の規定要因の分析を補うものとして、子ども観に子ども自身の性格や発達がどう関係しているかを考える(4)。

なお、前回の報告書同様、子ども観を尋ねた第3回より前の調査の項目に関しては、第3回調査で子ども観に関する設問（問14）に答えたケースのみの分析となる。

## 2.子ども観と教育行動

### 2.1 しつけの状況

まず、しつけの状況と父母の子へのコミュニケーション、テレビの見方への関わり方についての回答傾向を子ども観グループごとに確認し、元森(2009)のしかり方と育児方針、教育行動の分析と合わせて、子ども観の子育ての方針や行動への影響の全体像を確認する。

はじめに、第4回問14「平成13年1/7月生まれのお子さんのしつけ状況をおたずねします。以下の①～③の各項目のすべてについて『しつけの状況』『お子さんの状態』別にそれぞれあてはまる番号ひとつに○をつけてください」の回答のうち、前者の「しつけの状況」を示したのが、表3である。「お子さんの状態」は3で分析する。)ここでは、過去にしつけをした場合(挫折した場合もありえるが、基本的には身についてしつけを終えたということであろう)と現在しつけ中のものをあわせた値を示してある。

全体的に、「調整」派がしつけには熱心である。「知性×調整」と「感性×調整」双方が熱心なのは、「挨拶や返事などをする」「うそをつかない」「おもちゃや絵本をこわさない」「人のものと自分のものを区別する」「人に乱暴しない」など、他人に関わる事柄に関するしつけである。また、「知性×調整」のみが熱心なのは、「食事の後自分の食器を台所に運ぶ」「人の話は最後まで聞く」という伝統的なしつけと、「知らない人にはついて行かない」であり、「感性×調整」のみが熱心なのは、「遊具で遊ぶときに順番を守る」「公共の場(バス・電車、病院等)では騒がない」といった他人に迷惑にならないようにというしつけと、「道路に出るときは必ず左右を見る」である。

「積極」派、とりわけ「感性×積極」は、他のグループに比べてここであげられているようなしつけには熱心ではない。都会で生きるスキルである「知らない人にはついて行かない」なども、値が低いのは不思議である。

もちろんわずかな値の差ではあるが、児童中心主義的な子ども像を持っており、コミュニケーションを重視したしつけを行うグループが、実際のしつけ行動では後手に回っているのは興味深い。

表3 子ども観としつけの状況

	挨拶や返事 などをする	食事の後自 分の食器を 台所に運ぶ	人の話は最 後まで聞く	うそをつか ない	遊具で遊ぶ ときに順番 を守る	テレビやコン ピュータゲー ムをする時間 は決めている	おもちゃや絵 本をこわさな い	合計
知性×調整	10,539 97.9%	6,002 55.8%	8,075 75.0%	8,174 75.9%	10,300 95.7%	5,382 50.0%	9,781 90.9%	10,764 100.0%
知性×積極	8,822 96.4%	4,733 51.7%	6,523 71.3%	6,466 70.7%	8,652 94.5%	4,542 49.6%	8,113 88.7%	9,151 100.0%
感性×積極	9,861 96.4%	4,959 48.5%	6,863 67.1%	6,882 67.2%	9,728 95.1%	5,017 49.0%	9,017 88.1%	10,234 100.0%
感性×調整	10,243 97.9%	5,396 51.6%	7,361 70.3%	7,689 73.5%	10,079 96.3%	5,235 50.0%	9,543 91.2%	10,466 100.0%
合計	39,465 97.2%	21,090 51.9%	28,822 71.0%	29,211 71.9%	38,759 95.4%	20,176 49.7%	36,454 89.8%	40,615 100.0%

(つづき)

	遊んだ後の片づけをする	人のものと自分のものを区別する	人に乱暴しない	道路に出るときは必ず左右を見る	知らない人にはついて行かない	公共の場(バス・電車、病院等)では騒がない	合計
知性×調整	10,572 98.2%	9,341 86.8%	10,135 94.2%	9,651 89.7%	8,604 79.9%	10,347 96.1%	10,764 100.0%
知性×積極	8,923 97.5%	7,741 84.6%	8,439 92.2%	8,132 88.9%	7,018 76.7%	8,720 95.3%	9,151 100.0%
感性×積極	10,025 98.0%	8,455 82.6%	9,446 92.3%	9,140 89.3%	7,623 74.5%	9,813 95.9%	10,234 100.0%
感性×調整	10,331 98.7%	8,964 85.6%	9,928 94.9%	9,492 90.7%	8,166 78.0%	10,110 96.6%	10,466 100.0%
合計	39,851 98.1%	34,501 84.9%	37,948 93.4%	36,415 89.7%	31,411 77.3%	38,990 96.0%	40,615 100.0%

※「しつけをした(今はしていない)」と「しつけをしている」の合計

※クロス表において、残差が+1.97以上のものを太字、-1.97以下のものを下線とした。

## 2.2 父母の子へのコミュニケーション

次に、そのコミュニケーションに関する項目を見てみる。まず、参考のために、第2回問14「平成13年1/7月生まれのお子さんと遊んだり、食事をしたりして一緒に過ごす時間は、通常1日平均どのくらいですか」の回答傾向を見る(表4)。

母親に関しては、1歳半の時点なので休職中のケースも多く、「6時間以上」が平日でも4分の3近く、休日では9割以上を占めるが、子ども観グループごとに若干の差異は見られる。①お母さん・平日では、「感性×調整」が「6時間以上」の長め、「知性×積極」が「1～2時間未満」や「2～4時間未満」の短めを多く選択する傾向がある。「感性×積極」も、「4～6時間未満」が多くやや長めと言えよう。②お母さん・休日も、「感性×調整」が「6時間以上」の長め、「知性×積極」が「1～2時間未満」の短めを多く選択する傾向がある。

父親に関しては、③お父さん・平日は就業形態などに左右されると考えられるが、全体としては「1～2時間未満」と「2～4時間未満」に半数が集中している。その中でも、「感性×調整」は、「2～4時間未満」が多めで「30～60分未満」が少なめなど、長く取ろうとしていることが伺え、「知性×積極」は、「なし」の率が高いなど、短い傾向がある。「感性×積極」も、「30分未満」が多めと短いと言えよう。「知性×積極」は、「6時間以上」の率が高いが、これは父親の就業形態などの検討が必要である。④お父さん・休日は、全体で「6時間以上」が3分の2と子どもと過ごす時間をとろうという傾向がうかがえるが、中でも、「感性×調整」と「感性×積極」が「6時間以上」が多く、前者はさらに、「なし」「30分未満」「1～2時間未満」が少ないなど、長い傾向が見られる。逆に「知性×積極」は、「30分未満」「30～60分未満」が多く「6時間以上」が少ない、「知性×調整」も、「6時間以上」が少なく「なし」「1～2時間未満」が多いなど、短い傾向が見られる。